

「千葉氏

語る」だより

令和元年度

第8号

発行・編集

千葉氏を語る会事務局

発行日

令和元年9月1日

令和元年（第五回）

総会開催される

千葉氏を語る会の第五回総会は令和元年六月二十三日（日）千葉市文化センター会議室で開催されました。

定刻になり事務局長日向安昭より、本会員数は67名であり、本日の出席者は28名で委任状による出席者は17名合計45名で過半数の出席になります、本会の規約第8条により会議は成立いたしました。

と報告がなされました。続いて丸井副会長から開会の宣言があり、次に向後保雄会長より第5回の総会を迎えることになり、まずまずの活発に行動して千葉市の開府九百年に対応していきたい。そしてこの後石橋一展先生の記念講演があるそうですので大いに勉強して下さい。

次に来賓として千葉日報社長大沢克之助様、千葉日報会長長萩原博様、千葉市市会議員小川智之様の紹介がありました。それから佐藤芳雄幹事を議長に選出して議事に入る。

先ず第一号議案から第三号議案までを議題とし、日向事務局長より第一号議案平成三十年度事業報告を資料に基づいて説明がありました。

続いて鈴木会計幹事より第二号議案平成三十年度収支決算書を資料に基づいて説明があり、更に江波戸監事より第三号議案、前第二号議案収支決算書についての監査報告「平成三十年四月一五日会計監査を行いました。その結果

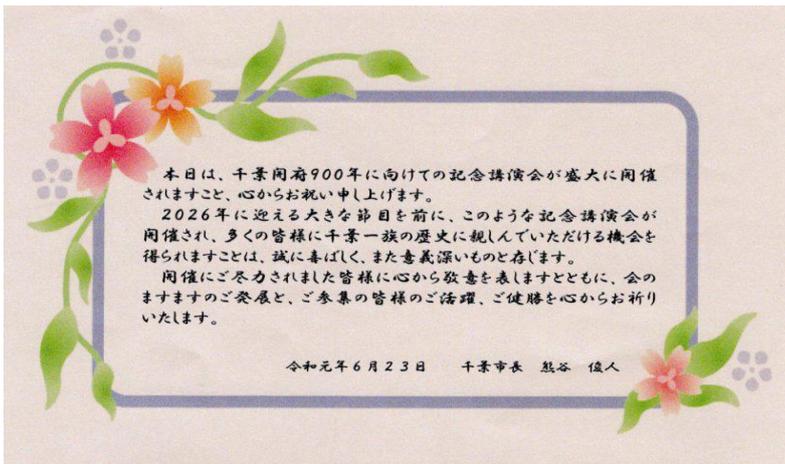
記帳簿及び諸帳票の記載整理も適切に処理されており正確なものと

認められます。という説明がありました。

議長より以上報告議案第一号議案より第三号議案について質問、ご意見等が御座いましたら挙手をして発言して下さい。議場から異議なしの声あり、それでは此の三件の報告議案について承認に賛成の方は拍手をお願いします。拍手多数あり。報告議案三件は原案どうり承認されました。議長より次に、協議議案に入ります。議案第四号を議題とし、再び日向幹事より令和元年度事業計画について資料により説明されました。次に議案第五号を議題とし、再度鈴木幹事より資料に基づいて説明がありました。議長より以上二件の議案を議題とし、質問、ご意見のある方は挙手をして発言して下さい。議場より異議なしの声あり、議長より異議ないものと認め全会一致で可決されたものと致します。議長から之で本日の総会での審議事項は全て終了致しました。ご協力有り難う御座いました。

なお、引き続き記念講演会がありますのでご参加下さい。

千葉市長からのメッセージ



記念講演

千葉一族、東氏の動向(要旨)

石橋一展

では胤頼はどのような経緯で京都とつながりをもったのでしょうか。

『吾妻鏡』(文治二年一月三日

今回の話では、①いわゆる「六党」の中でも異色の存在である東氏を京都との関わり関わりから読み解くこと、②あまり知られていない南北朝や室町期の様子を探ること、

③東常縁の動きを史料に依拠して整理すること、を目的にしたいと思っています。

一、東胤頼と京都

東胤頼(一一五五〜一二二八)とはどんな人物か。一言で説明すると千葉常胤の六男で母は秩父氏、父から下総東庄などを譲り受け、東六郎大夫(従五位下任官)と名乗る人物です。記録上の初見は『吾妻鏡』治承四年(一一八〇)六月二十七日条で、京都での謹慎から関東に戻り、源頼朝と面会する場面が描かれています。一説には、その際京都の状況を報告しつつ、頼朝に挙兵を促したといえます。

これらの所領をもとに発展した武家を「東氏」と呼んでいます。

二、東重胤・胤行の活躍

つぎに、胤頼の子息と孫である重胤と胤行の動向を追ってみたいと思います。

胤頼の子である重胤が史料上に現れるのは、建久六年(一一九五)八月十六日に開かれた流鏝馬の場面です(『吾妻鏡』同条)。彼も後に父胤頼に倣って上洛しています(『吾妻鏡』承元二年(一一二〇)閏四月二十七日条)。

この重胤の代あたりから、京都との関係に加えて、東氏のもう一つの特徴である「歌の家」としての動向も見えてきます。興味深いエピソードを紹介しましょう。

京から戻った重胤は、三代將軍の實朝に側近として仕えます。ある時下総に下向し数カ月が過ぎてしまいました。實朝は和歌でもって彼の帰還を促すのですが、それでも帰参が遅れ、實朝の怒りによって蟄居を余儀なくされました(『吾妻鏡』建永元年十二月十八日条)。

窮した重胤は時の執権北条義時を頼り、その助言で和歌を實朝に送り、事なきを得ます。義時に感謝した重胤は、子孫が長くその下風に立つことを約します(同二十三日条)。

重胤は和歌を駆使して將軍實朝と個人的な関係を結ぶ他に、実質的な最高権力者であった北条氏に近づくことも忘れなかったのです。重胤は實朝が暗殺される承久元年(一一二九)一月二十七日まで動向が追えませんが、その後は不明です。おそらく、實朝の死と共に隠居したのでしよう。

次に重胤の次代、胤行の動向です。彼も父同様將軍側近であったことが分かっています(『吾妻鏡』健保六年(一一二八)十一月二十七日条)。そして、承久の乱の際の活躍によって美濃国山田庄を授かった功績も忘れてはなりません。

しかし、胤行の業績でより特徴的なのは、文化面での活躍です。先行研究によれば、勅撰和歌集へ二十二首も選出されています。その様子は、藤原定家も知るところでした(『明月記』天福元年(一一三二)二月七日条)。

胤行は將軍の側近として多くの文化的行事に参加し、鎌倉の歌壇で

(あるいは下野宇都宮を中心とした歌壇でも) 歌を磨き、その力をつけていったのではないのでしょうか。

この「歌の家」としての伝統は室町期の東常縁も受け継いでいますし、戦国期の下総で編纂された『雲玉和歌集』に代表される千葉氏周辺の文化水準の高さにつながるものと言えるかもしれません。

その後の東氏は、胤行の後を継いだ泰行が、鶴岡八幡宮放生会の随兵となることを拒否して帰国したことが、將軍の命令に背いたとされ処罰の対象となる(『吾妻鏡』建長五年(一一五三)七月十七日、八月二日条)など、雌伏の時期が到来します。一方、同時期に美濃国山田庄に移った一流は京都との関係を維持して一定の勢力を保ちます。

下総東氏と美濃東氏、どちらが嫡流かということは定まりませんが、この時期以降は美濃の東氏の方が、社会的な認知度は高かったように思います。

三、南北朝・室町期の東氏

南北朝内乱が起きると、東氏の動向がまた活発になってきます。建武三年には足利氏に味方して戦う「東中務丞」(美濃東氏の常頭か)が見えます(「長善寺文書」)。

また、下総では長年にわたり金沢称名寺との所領相論があった庶流の上代東氏が混乱に乗じて奪い返そうとする事件も起きています(「金沢文庫文書」)。

室町幕府の一機関であった鎌倉府の統治下にあった下総では千葉本家の幼い当主、満胤を支える一族として下総東氏の動向が追えます(「香取大禰宜家文書」)。さらに、東氏庶流の海上氏は鎌倉府の奉行人になるなど、この時代にも各所で東氏の活躍をみることができのです。

四、東常縁、下向

享徳三年(一四五四)に鎌倉府の長官である足利成氏とその補佐役II関東管領である上杉氏との争いが勃発し、それが関東一円に広がりました(享徳の乱)。これに関連して起こった千葉氏の内乱により宗家は滅

亡してしまいます。その宗家再興を幕府(上杉氏を援助)から託されたのが、東常縁(一一四〇―一四八四)です。

室町幕府奉公衆であり二条派の歌人でもありました。下総に下向した常縁の陣には国分、大須賀などの一門も味方し、馬加城付近での合戦では宗家を滅ぼした馬加康胤方の原胤房に千葉に敗走させ、常縁は東庄に入部を果たしたといわれます(『鎌倉大草紙』)。

その翌年には馬加康胤と上総八幡で合戦を行い、敗死させます(『赤城神社年代記』康正二年(一四五六)九月二十八日条)。しかし、劣勢は挽回できず、美濃に帰還したといわれています。

応仁二年(一四六八)、に応仁の乱の余波で西軍の美濃守護代斎藤妙椿に美濃山田庄が奪われるという事件が起きました。常縁はこれに対して妙椿に和歌を送って変換を願い、翌年美濃に帰還して実現させた、という逸話が残っています(『鎌倉大草紙』)。また常縁は帰還後も関東と一定の関係を保ち、常縁の次男常和や甥の胤氏は千葉宗家の復権のために尽力したのです。

おわりに

以上、やや複雑な話になりましたが、京都とのつながりを持ち、歌の家として栄えた東氏の動向を鎌倉から戦国前期まで見通しました。系図の復元などをはじめ、まだまだ東氏のこととは分かっていないことがありますので、今後の課題とし、さらに皆さんと共に学んで参りたいと思います。

石橋 一展先生



聴講の皆さん



郡上東氏の文化遺産を

訪ねる研修会報告

会員 江波戸弘安

期日 令和元年八月六〜八日

参加者 十九名

内容

(郡上市大和町にて左記の

施設訪ねる) 金子徳彦氏

(元大和町職員、初代古今伝授の里

館)のガイドによる。

古今伝授の里フィールド

ミュージアム

東氏館跡(ガイド付見学)

篠脇城跡(ガイド付見学)

明建神社 神事見学

薪能くるす桜 観賞

(郡上市八幡町にて左記施設

見学、散策)

郡上八幡城

郡上八幡博覧館(ガイド付見学)

宗祇水 (ガイド付見学)

古い町並み(ガイド付見学)

豊富な流水を利用した、住民

生活に密着した水場

郡上東氏は千葉介常胤の第六

子胤頼が鎌倉幕府の創立に大功
を立てた事から下総香取郡東庄

三十三郷及び海上郡三崎庄五十

五郷(香取郡小見川町、山田町、

干潟町、銚子市、海上町、飯岡

町の一部に及ぶ地)を拝領し、

二代重胤三代胤行と伝領した。

「承久の変」(一二二二年)の折

従軍した胤行の戦功により美濃

国郡上山田庄を加領され、

美濃国郡上山田庄へ胤行が

初代美濃東氏として移る事

になった。以来三二〇年に渡り

統治することになった。東氏は

朝廷や幕府に仕えること多く

歌壇に通ずる環境にあった。

又、藤原定家の孫娘を娶るなど

東氏は代々和歌に秀でた家系と

となっていた。中でも第九代

当主常縁(つねより)は

古今和歌集の研究第一者として

存在感を示すことになってゆき

古今伝授を形式的に確立し、

求めて弟子となった連歌師宗祇

に伝授が行われ以後代々その

伝授が確立され、受け継がれて

いった。

古今伝授の里フィールドコミュ

ニジウム、

こうした東氏や古今伝授にちな
んだ和歌をテーマにした博物館

として、古人の活躍の様子が

資料と共に整理、展示されて

いた。

七日祭(なぬかびまつり)に

行われる明建神社の例大祭、

岐阜県無形文化財に指定されて

おり中世の田楽の様式を色濃く

残す世襲制の祭、鎌倉時代東氏

が千葉から伝えたとされる祭例

で、八〇〇年近い歴史があり

往時のままに厳格に守り伝えら

れている。神事が厳かに続く様

子に興味深く触れた。薪能(たき

ぎのう)くるす桜は、古今伝授

の祖、東常縁の物語である、八

幡町の村瀬家に宝暦九年(一七五

九年)に筆写された「久留春桜」

が残されていたものに能楽師の

味方健氏に能として復曲を依頼

し、大和町の青年部を始め全町

あげて町おこしの能として取り

上げ昭和六十三年八月初上演に

こぎつけたもので以来三十一回

の上演となっている。

ものがたり、

常縁が主役として

「白山の僧が都へ上る途中、
妙見宮に立ち寄ります。そこで

古老からこの地のいわれを聞き

ます、その夜旅の僧の夢枕に東

常縁が現れ、和歌の真を語り古

の優美な大和舞を舞いながら花

吹雪の中に消えてゆくー」

東氏館跡、昭和五十四年大和町

の篠脇城跡の麓近くの工事現場

から偶然発見されたもので、

池泉跡、建物跡も発見されこれ

から見る庭園として景観は高く

評価され、昭和五十九年、国の

名勝に指定された。その後庭石

の補強工事、築地堀池泉部の復

元工事を行い、古今集に詠まれ

た植物の植栽を行い、奪われた

城を取戻した十首の歌碑を整備

するなど現在に至る。

郡上八幡城、東氏の後を継いだ

遠藤氏の居城現在の城は昭和

八年再建)

郡上八幡博覧館、町の歴史、

物産、豊富な水と生活、郡上お

どりの説明(八月はおどりのシーズ

ン、実際の郡上おどり見学し、おどりに

参加した者もあり)

宗祇水、古今伝授を受けた宗祇

が逗留した草庵があった処、

現在、名水百選に選ばれ訪ねる人多し。

古い町並み、職人町、鍛冶屋散策

豊富な流水を住民生活に活用した水場のある(いがわ小径)、宗祇水、古い町並み、をガイドの説明聞きながら散策。

写真は明建神社神事と薪能



千葉氏の当主はなぜ

「千葉介」なのか

会員 山内博

律令の官職制では、「介」は国名(上総・下総など)の下につくもので郡・荘・郷名の下につくものではなかった。

平安中期以降の頃から、地方の国衙(国の役所)では、国司などの高位の官人は在京していることが多くなっていて、実際の業務は地方の在庁官人の中の有力者が「介」などに任じられて国衙の運営を行っていたとみられる。

千葉氏は国衙の在庁官人であり、常胤の父常重は、大治五(一一二一〇)年に下総権介「権介」とは定員外の役職であったことが文書によって確認され、朝廷の除目による補任と考えられる。しかし、これがなぜ千葉介になったのであろうか。

当時の国衙は国司の派遣する目代の統括のもとに運営されていたが、ここに郡司クラスの豪族が在庁官人となり国務を分掌していた。これらの豪族は在京国司の任命で国衙内の介(あるいは権守)に任命されたが、朝廷補任の除目による「国名」

+「介」と區別して、「自己の本拠地の地名」+「介」を称したのであろう。

「吾妻鏡」の中に、相模の三浦介、伊豆の狩野介、周防の大内介など千葉介同様の「地名」+「介」が見出されるが、これらの地名プラス介は朝廷の除目によって補任された痕跡ない。

また「吾妻鏡」には朝廷の補任の下文を持たない三人の有力守護が幕府の奉公人に次のように答えたと言っている。

○千葉成胤…先祖の千葉大夫(常重)が元永(一一八二一〇)年以後、

当庄(千葉庄)の検非違所だったので、頼朝の時常胤を下総一国の守護職にした。

○三浦義村…祖父義明が天治(一一二四二六)年以来、相模国雑事にかかわって来たので、頼朝の時、検断の事を沙汰すべしと義澄が命ぜられた。

○小山朝政…先祖下野少掾豊沢が下野の押領使として検断の事を執行し、秀郷が天慶三年(八七九)官符を賜った後、十三代数百年にわたって奉行して断絶なく、頼朝の時の

建久年中(一一九〇(九九)亡父政光入道がこの職を朝政に譲与した時、安堵の下文を賜った。

いずれも、「検非違所(使)」 「雑事…: 検断」「押領使」といった軍事・警察権にかかわる職掌(検断権)が前提となっていることを証言している。

ただし、三浦・小山両氏の場合には、国の検断権であり、千葉介の場合には「当庄検非違所」とあって千葉庄の検非違所であるが、千葉庄の検非違所は江戸湾(東京湾)の海上交通を管轄し、海賊の取締まりをする重要な拠点にあることを考えれば、「当庄」でも差支えないと思える。

千葉介は、千葉庄の庄官であるとともにこの地に置かれた国の出先機関でもある検非違所の役職を担当したと云える。

「千葉介」は系譜上、平忠常の子・常将に由来するとされているが、記録上初めて確認できるのは千葉常重もしくは千葉常胤であり、それ以降、天正一八年(一五九〇)に千葉重胤(あるいは千葉直重)が豊臣政権から所領を没収されて滅亡するまで存続した。 以上

本会からのお知らせ

本年度も総会を終わって本格的に活動する時期で御座います。

本年度は広く市民に働きかけるような講演会も計画されております。

なお、会員の参加者を募集しております。千葉氏を語る会に参加して見たいという方がおりましたら是非一緒に語って見ませんか多くの方にお声を掛けて下さい。之もお願い致します。

◇年会費 三千元

◇活動 講演会、勉強会等

◇連絡先 事務局長 日向

090 8305 660

当会ではホームページを開設しています。パソコン、スマホから見る事ができます

グーグルの検索で

千葉氏を語る会

と、入力あるいは音声入力で検索すると

千葉氏を語る会ホームページが表示されますのでそこをクリックしてください。

一口メモ

三船山合戦(古戦場) 紹介

会員 高野利太郎

ここは昔房総では大きな合戦があったところである。これについて、少し話して見たいと思います。時は永禄10年(1567)尾張の織田

信長(33歳)か美濃の齋藤龍興を稲葉山に滅ぼし、ここを岐阜と改め自身の居城とした。その年房総では小田原の北条氏と安房の里見氏が、長い間西上総(木更津市、君津市、富津市)の地域の覇権を争っていた。ここ三船山は房総丘陵の一分で

あり、三つ船を伏せたような形をした標高187.7メートルの小高い丘で、富津市と北の君津市の境界線に位置し、南側は急な崖になっており、第二次国府台合戦に勝利を収めた北条氏は南総の拠点で里見氏の居城である佐貫城を狙って、この三船山に砦を築いて北条氏配下の藤沢播磨守や田中美作守等に守備をさせた。そして、8月23日、北条氏

政、氏照父子は三千騎と言われる勢力で真里谷(木更津市)方面から三船山に登り陣所に結集した。三千騎

と言うが、この小さな山の中では三千の大軍を結集するのは物理的に無理であろう。

一方里見軍は勝浦の正木大膳を三船山北側の八幡山に潜ませ、父里見義堯は三船山の南虚空蔵山(富津市障子谷)に陣地し、子義弘は西南八幡の森(富津市相野谷)に陣取りして、矢戦が始まると北条軍を出来るだけ引き寄せてから、かねて待ち伏せさせておいた正木軍百騎に合図して横から切り込み攻撃をさせた。北

条軍は混乱し、道に迷う者、退却する者が続出した。八幡山の北側は「蓮沼」と言う沼があり、道不案内の北条軍は、朝霧のため次々と泥沼にはまり、身動きが取れなくなっ

て行ったのである。こんな中で武蔵国岩付(さいたま市岩槻区)から、大田氏資(道灌の父)52騎の兵を率いて北条軍に参戦していたが、全員が討ち死にしたと言われている。里見義堯は9月8日岡本城(南房総市富浦)の实子里見義頼に「敵は退散したので、我々の満足は、この上もないものだ」と伝えている。そして

義弘も又弟の義頼に「敵の退散したことは再三申すようだが大慶である。」と喜びを伝えている。

このように、第一次国府台合戦及び第二次国府台合戦と二度に亘り、北条軍に敗れた里見氏が三船山合戦で最期に勝利して、房総の地に勢力を回復下野であります。 以上



編集後記

編集子

大変遅くなりましたが会報第八号をお届けします。本年も会員一丸となって本会の設立趣意書に乗っ取り、各々の事業を確実、誠意を込めて推進し、会員の納得を得られるように会の運営を進めて参りたいと思っております。どうかご協力戴きますようお願い致します。